欲望より生まれし、再誕の紅き鳥

古歌亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
欲望より生まれし、再誕の紅き鳥

【Ｎコード】
Ｎ９３３９Ｙ

【作者名】
古歌亮

【あらすじ】
「欲しかったものは手に入った――」そう言って、鳥のグリード『アンク』は死ぬことができた……と、思いきや目が覚めたら自分の体は本当の鳥になっていたり、なぜか過去だったり！？「こいつは面倒なことになったなぁ……」新たに手に入れた力でアンクはどうするのか！？※この小説は東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作であり、仮面ライダーオーズからは、登場人物であるアンクのみしか出ません。仮面ライダーが戦う小説を期待している方は、残念ながら期待外れになると思いますのであらかじめご了承ください。

昨日のメダルと鳥になった腕

「アンクッ！？」

パリン、という小気味よい音が響くと紅いタカを象ったメダルが割れた。
無の紫（むらさき）の力により崩壊寸前だったが、“友”のために最後まで耐えつづけたソレは、無情にもあっさりと割れた。
しかし黄、緑、青、灰の他の４つのメダルが砕け散ったのに対し、紅のメダルだけは……まるで原点である鳥の卵のように。消滅することなく、真っ二つに割れた。

そこで俺は“死んだ”と思った。
だが、なんの奇跡か。はたまた呪いか。
セルも、肝心のコアも真っ二つに割れたにもかかわらず、自我が残っていた。
そして目に写ったのは、重力に従い地面へと落ちていく“友”の姿だった。

「映司！目ぇ覚ませ！死ぬぞ！！」
「アンク？……ああ、いいよ、もう無理だ。お前こそ……」

あきれるほど諦めの悪いコイツが、な。
ホントらしくないよな、おまえも……俺もな。
８００年……いや、実質１０年と少しの“生”の中でこれほど充実したものは無かったな。

「ハンッ！俺はいい。欲しかったものは手に入った」
「それって命だろ？死んだら……」
「そうだ、お前達と居る間にただのメダルの塊が死ぬとこまできた。こんな面白い、満足出来ることがあるか」
「お前を選んだのは、俺にとって得だった。間違いなくな」
「おい！どこ行くんだよ！？」
「……お前の掴む腕は、もう俺じゃないってことだ」

本当に、嘘偽り無くお前には感謝してるんだぞ？
最初は唯ののバカでお人よしで無欲な能天気野郎だとしか思ってなかった。
だけどな、そんなお前が。変えちまったんだよ、俺を。
じゃあな、映司。
お前は一人じゃないんだからな。

そして俺は……“死”ぬ事ができた。

何か、聞こえる。
何処か親近感の湧く、鳥の鳴き声。
耳を澄ますと、再び空気を裂くような声が遠ざかるように聞こえた。
どうやら、猛禽類のモノのようだ。
なるほど。どこか親しみ深いわけだ。
俺は３種の猛禽類の遺伝子から作られたメダルの化け物。グリードなのだから。
そして俺は最期……俺のコアが割れ、死んだ筈だ。

（案外、俺もしぶといのかもな）

現に意識があるよいう事は、完全に死んでいないということだ。
死んだ……か。
まったく、ただのメダル（よくぼう）の塊が最後に求めたのが“命（みなもと）”だなんてな。
我ながら実に滑稽な話だ。

（――――まだ死なないのか？）

他のグリードの消滅も何度か見たが、案外あっさりと潔いぐらいだった。
“死”っていうのもそんなモンだと思ってた。
が、まだ死んでいない？
まさか、まだこんな風に思考し、思案する余裕があるとは。

（おいおい、まさか天国やら地獄やらに来たなんてオチじゃねぇだろうな？）

そうして、不完全だった意識がついに覚醒した。
見えてきた光景は天国でも地獄でも無く――――――
真っ青な……まさに蒼穹の、青空だった。
そして下には、茶色の岩肌が見えた。
なにか可笑しい。たしか、俺はトウキョウとかいう国にいた筈だ。
だがここは、建物どころか見える範囲に人っ子一人いない。
果たして、そこは別世界だった。

（どこだ？ここは――）

その時、なにか違和感を感じた。
ずっと腕の姿で活動してた影響か、グリードの姿を取り戻した時にも感じた自分の体への疑問。
疑問の正体を探ろうと、自分の体を見回す。

（なんだ、これは！？）

驚愕。その一言に尽きる。
腕があるはずの場所には、薄く、くすんだ赤い翼が。そして赤い体毛……
首がうまく廻らないので完全に把握できてはいないが、この姿は――

「鳥になった、とでもいうのか？」

戸惑う鳥と、導く栗鼠（前書き）

なんとなく、物語を進行させるには説明役が必要ということでなぜかエセ関西弁キャラを出すことに。
せやけど、なんで関西弁なんやろ？

戸惑う鳥と、導く栗鼠

赤い鷹のような鳥になってそれなりに年月が経った。
結論から言ってしまえば、鳥としての生活も悪くはない。
腹が減ればそこらへんの虫を食べ、自由気ままに空を飛び、今度はそこらの果実を食べ……
食べるというより、鳥のクチバシだから飲み込むという感覚に近い。
それが幸いし味覚がある今、虫を食べるときは味を感じなくて済む。
それから、赤い鳥なんて人間の前に出れば狩られるだけだと思っていたが、どうやらこの一帯は文明のレベルが低いらしく、鳥を狩猟するという感覚がなさそうだ。
酷い時なんか神の使いだ。とか叫ばれた上に拝まれてしまった。
ま、つまりはそれなりに楽しくやっているって事だ。

ここ最近、自分の体の中に変化がある事に気付いた。
事の発端は大体ひと月前。いつも通りエサを取っていた時だ。
体の内から何か渦巻くような――――そう、まるでグリードだった時にセルメダルが溜まり、力が蓄えられたような感覚が廻った。
今日も、エサを捕食したと同時にそれがまた増えたような気がする。

そんな風に新しい体について考えているときだった。

「そこの鳥のあんさん」
「？」
「そうそう。あんさんや」

そう言って話しかけてきたのは、人語を操る黄色いネズミのような奇妙な奴だった。
まぁ俺も人のことを言えないがな。

「なにか用か？」
「おぉ！俺の見立てやったら二、三十年ぐらいしか生きてへんやろうに、もう話せるんかい！？」
「いや。普通だったら鳥でも鼠でも一生話せないだろ……」
「鼠やあらへん！栗鼠や！」
「知るか」

なぜか、伊達にアンコと呼ばれていたことを思い出した。

「で、つまり俺とお前はその妖怪の一種って事か？」
「せやせや、あんさん頭えーな！」

「……」

なんか、馬鹿にされている気がするが……

ともかく、だいたいの事情はこの鼠の説明で解った。

妖怪は、人間の恐怖や妬みなどの負の感情から生まれた超自然的な生命体。

そんな妖怪は、人間を喰すか、もしくはそれに伴う行為で恐怖させる事によってソレを糧にし、自らを成長させるとの事。

「で、俺は親切さかい、事情をよー知らんあんさんに説明したろ思ったんねん」

「悪いが必要ないなぁ。俺は俺の好きなように生きていく」

「せやけど、なんかして妖気を補給せんと……妖怪は消えて無くなってまうんやで」

「何？」

鼠が聞き捨てなら無いことを抜かした。

「妖怪はな、妖気を消耗しながら生きるんや。せやから妖気が無くなってもうた妖怪は消えて死んでしまうんねん」

……妖怪っていうのはどことなく、グリードと似ているような気がする。

例えるなら妖気はセルメダルと言ったところか。

欲望をため込まねばやがて自壊してしまう。

これもなにかの因果なのだろうか？

「で、その妖気を補給するにはどうすればいいんだ？……人間を食べる以外に」

「なんや、あんさん人間食べたないんか？」

「まぁ、ちょっと理由（わけ）があってな……」

「せやなぁ……ほなら、俺が直に見せたるわ！」

「そうか」

成り行きとは言え、面倒な奴に巻き込まれた。

どうやら俺はこういう奴らに巻き込まれるきらいがあるようだ。

「そういや、あんさんの名前なんていうんや？」

「……アンク」

「アンコ？」

「ア・ン・クだ！」

「俺の名前はマシィゆうんや、あらためてよろしゅうなアンコのあんさん」

「アンクだ！」

そんなこんなで鼠と共に人里へとやってきた。

余談だが、移動手段は俺の足の爪で鼠を掴んで。という運搬をした。
傍(はた)から見れば鷹に捕獲された鼠にしか見えなかったことだろう。
……いい気味だ。
そして鼠に導かれるままに一つの民家に侵入して、下から死角になる骨組みの部分に陣取り、人が来るのを待った。
そして、人が近づく気配がすると鼠は――

「ほな、行くで！」

そういうと、鼠は骨組みから飛び降りた。
由加にトンッと軽い音を発寝ながらの着地。
次の瞬間、鼠の中から禍々しい何か（おそらく件の妖気というヤツ）が溢れ出たかと思うと、鼠の全身を包んだ。
なんとなく、グリードがセルメダルのエネルギーを使用するような、そんな印象を受けた。
そして、驚くべきことに体調が１０数ｃｍだった鼠の体が１４０ｃｍぐらいまで伸び、人間の子供を姿を象っていた。

「どや！ちゃんと妖気を補給してればこんな事造作も無いんやで～」
「誰だ！」

騒ぎを聞きつけて、人間の男がやってきた。
鼠は待ってましたと言わんばかりにまた妖気を右腕に顕現し……
…男に飛びかかった。

「キキィーッ！」
「な！？うわあああああああっ！！？？」

そして、右手を男の頭に放ち、妖気が男に吸い込まれた。
それと同時に、まるで食い殺される瞬間の人間のように脅えた声で吠えた。
喉が枯れるまで悲鳴を出したが、やがて気絶し倒れた。
すると男からなにかどす黒い物……妖気が先ほどの数倍に膨れ上がり、漏れ出した。
それを掴むと、まるで饅頭でも食べるように口に放り込んだ。

「今んはな、幻覚を見せてな。その恐怖を喰らったんや」
「なるほど……」

これが『それ相応の恐怖』というヤツか。
なんというか、ヤミーが欲望を増長させてメダルを作るのと似ている気がする。
……一体どこまで似ていれば気が済むのやら。

「ほな、アンコのあんさんも向こうの人間にやってみい」
「わかった」

俺はグリードだった時に、ヤミーを生み出すために体内からセルメダルを一枚取り出すイメージを浮かべた。
果たして、少々くすんで黒く焦げたような色だが、セルメダルのよ

うな物がクチバシに挟まれる形で生成された。
そして、騒ぎを聞きつけてやって来た人間に向かって……それを放った。

「がっ！？」
「よっしゃ、成功やね！」

さきほどと同じように人間が倒れ……これまた鼠の時と同じように黒い塊が人間から出てきた。
妖気は吸い込まれるように俺に近づき、分散して俺の体に吸収された。
途端に、妖気の総容量が増えた感覚があった。

「よっしゃ、ずらかるであんさん！」
「ああ、わかった」

鼠の姿に戻ったソイツを掴み、人里から脱した。
なにやら人間たちが下で騒いでいるが……どうでもいい。
こうして俺は、グリードの根本的なものから離れられない事を経験ともに知ることになった。

ま、命があるだけ儲けもんだと思うがな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9339y/

欲望より生まれし、再誕の紅き鳥

2011年11月29日01時53分発行